

●映画関係雑誌叢書1

記録映画作家協会機関誌 一九五八年六月↓一九六四年三月

記録映画

復刻版 全6巻 別冊1

●発行 記録映画作家協会（一九六一年に「教育映画作家協会」から改称）

●体裁 B5判・上製・総2、694頁

●別冊 解説・総目次・索引（分売価格 本体2、000円＋税）

ISBN 978-4-8350-7826-7

●解説 阪本裕文

佐藤 洋

●推薦 川本博康

マーク・ノーネス

松本俊夫

●揃定価 本体150、000円＋税

配本 巻数	復刻版 原巻号	原本発行年月	刊行・本体価格	
			第1回	第2回
第1巻	創刊号～2巻5号	1958年6月～ 1959年5月	2015年12月 本体75、000円＋税	ISBN 978-4-8350-7817-5
第2巻	2巻6号～3巻4号	1959年6月～ 1960年4月	2016年5月 本体75、000円＋税	ISBN 978-4-8350-7821-9
第3巻	3巻5号～4巻3号	1960年5月～ 1961年3月		
第4巻	4巻4号～5巻1号	1961年4月～ 1962年1月	2016年5月 本体75、000円＋税	ISBN 978-4-8350-7821-9
第5巻	5巻2号～6巻1号	1962年2月～ 1963年1月		
第6巻	6巻2号～7巻2号	1963年2月～ 1964年3月		

「記録映画作家協会会報」も引き続き復刻刊行いたします。



表示価格はすべて税別

不二出版

T113-0023
東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替001600294084

2015/12

記録映画作家協会機関誌

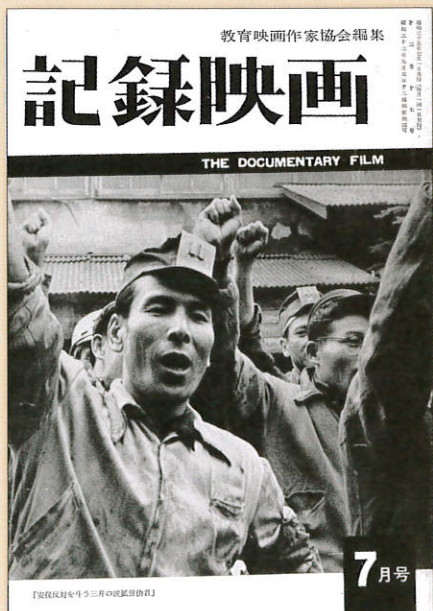
一九五八年六月↓一九六四年三月

※一九六一年に「教育映画作家協会」から改称

記録映画

復刻版

全6巻 別冊1



▲第3巻第7号

●揃定価 本体150、000円＋税

●配本 全2回配本

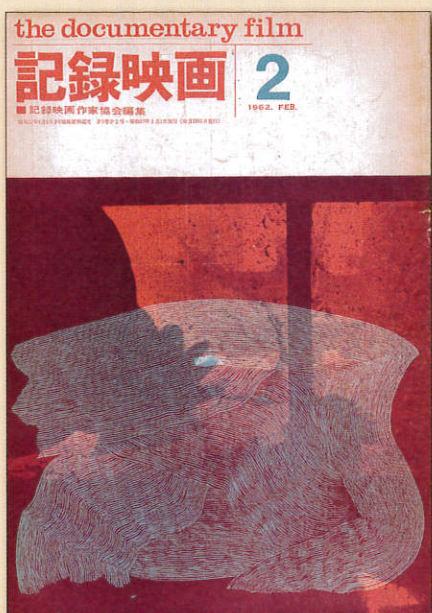
●解説 阪本裕文

佐藤 洋

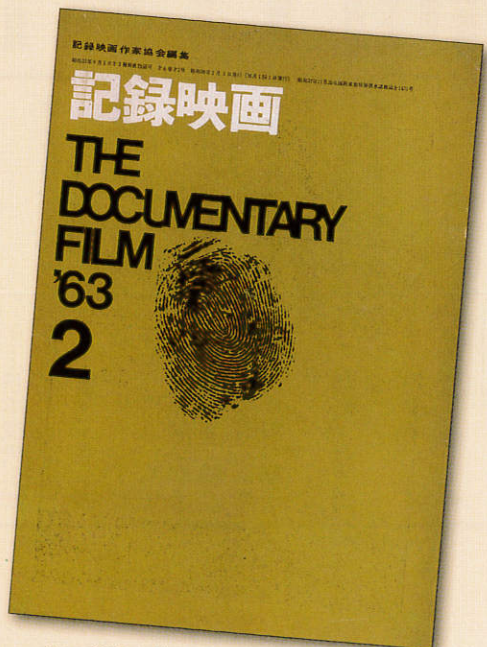
●推薦 川本博康

マーク・ノーネス

松本俊夫



▲第5巻第2号



▲第6巻第2号



▲第1巻第4号

ドキュメンタリー映画のみならず、
教育映画・劇映画・テレビドキュメンタリー・
文学・美術・音楽・写真など、
様々な領域の諸動向の線は、その全てが何らかの形で
雑誌『記録映画』という点を通していたことが分かるだろう。

不二出版

記録映画

1958 No. 1

発刊のことば

かねての念願がかなって、わたしたちの教育映画作家協会は、ここに、『機関誌「記録映画」』第一号を発刊いたします。

これは、わたしたち記録映画、教育映画作家なまの共通の広場です。共通の討論の場です。

これはまた、作家と教育映画界との交流の場です。

さらに、これはまた、作家と観客との結びつきの場であり、文化の各パートの専門家や外国の記録映画界との交わりの場です。

教育映画作家協会は、記録映画、教育映画作家の集まりで、作家生活を擁護しあい、創作活動の前進を目ざして努力しあう団体です。

こんにち、わたしたちは、新しく解決し、発展させなければならない多くの課題に直面しています。

記録映画におけるリアリズムの問題、科学映画の新しい展開の問題、児童劇映画の新たな分野の開拓の問題、記録・教育映画におけるおもしろさの問題等々、創作上の技術と理論の問題はもとより、官製の思想統制、教育統制、道徳教育問題との対決、作家の自主性の（主体性）確立の問題など、平和と自由と人間の解放の問題と直接関係してくる、いわば作家としての生命にかかわる課題に直面しているのです。

こうしたことがらには一人で解決できるものではありません。作家が全体として、意識して、共通の課題として取りあげ、取り組むときにはじめて解決の糸口をつかむことができるのです。

しかも、それは、観客との結びつきのなかで、また、さらに各専門文化人との結びつきのなかで、いっそうたしかに、いっそう豊かな解決が見いだされるものだと考えます。

これまでも、教育映画作家協会は、会員作家相互の連絡と意思の疎通のために会報を編集発行してきましたが、当面する多くの課題を乗り越えて、創作活動をいっそう前進させようとする気運の昂揚にもなっており、会報もまた、新たな発展を迫られています。



カット・朝倉 撰

機関誌『記録映画』の復刻にあたって

川本博康（日本記録映画作家協会会長／映像作家）

一九五〇年四月、社団法人・日本映画社（旧・日映）の助監督採用試験を受けて、私はドキュメンタリー映画作家を目指しての道を歩み始めました。しかし日映は、戦時中に多くの報道班員を旧日本軍の占領地に派遣していたので、戦後しばらくすると、その人たちが続々と復員してきて、会社は社員過剰になり、経営が立ち行かなくなると、多くの社員に餓首を宣告しました。

その結果、大ストライキが起こり、日映は倒産をしてしまいました。私が日映に在籍したのは約九か月です。長い日映の争議のあとで、私たちは旧日映に在籍していた先輩たちと一緒に新日映の近くのビルの屋上の木造家屋を借り、とにかく前途にささやかな希望をもって、日映作家集団と称するグループをつくりました。そこは、チリチリになりそうな私たちが、記録映画に携わること、何とか続けるための拠点だったのです。新会社の日映新社からは仕事は来るとは思いませんし、私たち助監督連中は、移動映写班などをつくり、それを手伝いながら、ほんの小遣銭を手にし、まだ親がかりの特典があるので、食べることだけはどうにか出来たのです。

しかし、家族をかかえた年配の監督や脚本家たちは、家族たちを養わねばならず、大変な苦勞をしたと思います。でもこの集団は、一九五五年三月に結成される教育映画作家協会の母体のひとつとして、大きな役割を果たしたと思います。

日映作家集団以外にも、不遇の記録映画作家や、助手、脚本家たちが巷にあふれていました。東宝教育映画部、理研映画部、その他の群小プロを首になつた監督や助監督、脚本家たちです。カメラマンやライトマンたちの技術者も、大勢企業から首になって困窮していました。この人たちはそれぞれに、日映技術者集団、東宝商事といった集団をつくり上げていたが、とにかく欲求が激しく、自分たちの満足する民主的な映画をつくるのではないかと、という欲求が激しく、そのような映画製作を最優先する機能をつくるべく誕生したのが、記録映画（教育映画）製作協議会です。ここでは『日鋼室蘭』『月の輪古墳』などの作品をつくり、上映会や移動映写班で上映までしたのですが、何しろ経済的裏付けが弱く、製作に多くの費用がかかり、スタッフの人員費などゼロに近い状態で、大きな赤字をだし、それ以後の映画製作は不可能になり、協議会は残念ながら解散しました。

そこで私たちはあらためて考えました。「民主的な良い映画を作ることは大切だが、その前に自分たちの生活が成り立たなくてはなりません。先ず自分たちの生活を安定させてから、自分たちの作りたい民主的な映画を作ろう！」

この発想は全員が納得し、当時、ようやく各大企業から発注され始めた企業PR映画のスタッフとして、仕事に就くことに力を入れ始めました。私たちの中には多くのベテランの映画人もたくさんあり、その人たちの仕事を獲得する能力に期待し、さまざまな集団を作っていた多くのフリーランサーの映画人が一つになり発足したのが、教育映画作家協会なのです。この作協が誕生すると、岩波映画などの大手の短篇企業の社員スタッフや、その他の企業に所属するスタッフも入

もくじ

- ★発刊のことば……………(1)
- ★記録映画発刊によせて：阿部慎一……………(2)
- ★戦後の記録映画運動(1)
— 記録教育映画製作協議会
の運動を中心に—：吉見 泰……………(3)
- ★前衛記録映画の方法について……………(6)
- ★「アラン・ルネエ」と……………(8)
- ★フランス記録映画……………宮本正名……………(8)
- ★座談会 教育映画をめぐって……………(12)
- 出席者 岡田 好枝 海貝 英子
森 和子 佐木 秋夫 山家 和子
大久保正太郎 菅 忠道 鈴木 幹人
高橋美代子 岩佐 氏寿 吉見 泰
かんけまり 谷川 義雄 中村 麟子
★メソポタミアの経緯……………(20)
- 優越感について—：桑野 茂……………(20)
- ★作品評「この目で見たッ連」……………(24)
- ★対談「おふくろのバス旅行」と……………(25)
- 「きよ子ちゃん」の日記……………(25)
- 厚木たか・藤原智子……………(25)
- ★プロダクションだより……………(26)
- ★科学映画「死を運命づけられた人々の命のために」：ゲイワノワ……………(28)
- ★現場通信……………(28)
- 下水にもぐった話……………岩佐氏寿……………(30)
- 忘れられた土地……………野田真吉……………(30)
- ★「人災」ミクロの世界：杉山正美……………(31)
- ★書評 野田真吉 岩佐氏寿 谷川義雄……………(32)
- ★ワイド・スクリーン 編集後記……………(32)

つてきました。

したがって、消失した記録映画製作協議会が、そのまま作協に引き継がれたのではなく、引き継いだのは、自分たちの作りたい民主的な記録映画を、やがては作ろうという、固い精神のみということでしょう。

PR映画の製作が盛んになったのは、ちょうど一九五五年ころからで、私たちの作協が誕生したころとほぼ一致しています。ベテラン先輩たちの努力により、作協のフリー会員は大手プロダクションの受注した沢山のPR映画のフリーのスタッフとして、各プロダクションに次々と雇用されはじめ、更にテレビ映画誕生の恩恵も受けて、仕事は目に見えて増加し、安定してきました。私たちの見通しは正しかったのです。

それが一九五八年から一九六五年まで、機関誌『記録映画』を発刊できる態勢になっていった、ひとつの裏付けともいえるでしょう。

このたび『記録映画』が、不二出版のご尽力により復刻されることを知り、大変嬉しく思います。当時の私の原稿三篇をあらためて読んで、当時の状況と自分の考え方を知り、なつかしく思いました。初代作協の運営委員長・吉見泰氏の努力によって、機関誌が実現した時の喜びは、私の記憶の中で、大きな喜びとして、今なお鮮明な印象をおびて残っています。それは、私にとつては日映入社以来の先輩たちにとつては戦前からの、自分たちのドキュメンタリー映画に対する考え方や主張が、活字になって掲載される期待を信じたからでした。

しかし、その喜びもわずか一年ほどで消滅してしまいました。それはこの『記録映画』の編集権を、ある特定の会員たちによって占有され、一般会員の機関誌への原稿掲載が著しく減少してしまつたからです。このグループは、全く自分たちだけの一方的な考え方で編集方針を決め、それに合った原稿と、更には外部の同志を考えた人たちに原稿を依頼し、一般会員の原稿が著しく減少するという結果を招きました。日映作家集団の時から、ドキュメンタリー映画に対する私たちの主張とは、彼らは違った意見を持っていたのです。彼らグループの行動は今考えても、許し難いものです。そして、このような偏つた編集方針は、売り上げにも影響を与えたのか、折角誕生した作協機関誌も、スポンサーの意志によって発行を打ち切ることになってしまいました。

この『記録映画』を廃刊に追い込んだグループの人たちは、作協を集団脱会し、別の新しい「映像芸術の会」と称する集団をつくりましたが、「映像芸術の会」も分裂し、数年で消滅して、二度と彼らの集団は生まれませんでした。そして、彼らと行動を共にした多くの若い映画作家たちの活動が著しく低下してしまつたことは、どう考えても残念なことでした。

日本記録映画作家協会は、以後、数々の活動を行い、『世界の青春 ソフィア 1968』、『燃え上がる炎』（作協自主作品）、『街道に残る文化財』、『多摩川 第一部』、『多摩川 第二部』、『東京の下町』（東京都教育庁文化課からの発注）など六本の作品をつくり、現在も立派に活躍し、五〇年をこえる歴史をつくりました。現在も作協は、機関誌にかわる『記録映画』という小冊子を出しながら、毎月一回様々な人たちの作品の上映会をしています。もし興味をもたれた方があれば作協にご連絡ください。

かつての『記録映画』を復刻していただいた不二出版には、深く感謝して私の話は終わります。

第3巻第4号

■作家に読者をつぶす
「記録」教育映画ガイド

●本誌の設立に際しての記念文

●世界の
実験映画を見る会
四月例会

●前衛記録映画の方法について
松本俊夫

●戦後記録映画運動についての一考察
野田真吉

●記録映画製作協議会の運動について
野田真吉

●記録映画製作協議会の運動について
野田真吉

●記録映画製作協議会の運動について
野田真吉



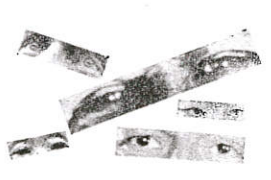
飛鳥美術
「飛鳥美術」は、戦後初期に活躍した作家の代表として、戦後初期の状況を反映させた。その時代を表現する。
撮影・若・佐藤忠男
撮影・大小島真一



おやしじ
共同制作社 制作
おやしじの学生生活
おやしじの学生生活
おやしじの学生生活
おやしじの学生生活

第1巻第1号(創刊号)

第2巻第8号



記録映画

1959年8月号
第2巻第8号

時評
安保条約改定と記録・教育映画

野田真吉

野田真吉は、安保条約改定と記録・教育映画との関係について、鋭い批判を述べた。彼は、記録映画が単なる教育の道具として用いられるべきでなく、社会の現実を映し出すべきものであると主張した。また、野田真吉は、記録映画の制作が、戦後日本における民主化の過程を映し出す重要な手段であると見做している。彼は、記録映画が、権力者の横暴を暴き出し、国民の目を覚ましてくれるべきであると訴えている。野田真吉の文章は、論理的であり、かつ感情的な訴求力を持っている。彼の主張は、当時の記録映画界に大きな衝撃を与えた。野田真吉の考えは、後の記録映画運動に大きな影響を与えた。彼は、記録映画が、社会を変えるための重要な武器であると信じている。野田真吉の文章は、読者に強い印象を与える。彼の主張は、当時の記録映画界に大きな衝撃を与えた。野田真吉の考えは、後の記録映画運動に大きな影響を与えた。彼は、記録映画が、社会を変えるための重要な武器であると信じている。野田真吉の文章は、読者に強い印象を与える。彼の主張は、当時の記録映画界に大きな衝撃を与えた。野田真吉の考えは、後の記録映画運動に大きな影響を与えた。彼は、記録映画が、社会を変えるための重要な武器であると信じている。

野田真吉

野田真吉は、安保条約改定と記録・教育映画との関係について、鋭い批判を述べた。彼は、記録映画が単なる教育の道具として用いられるべきでなく、社会の現実を映し出すべきであると主張した。また、野田真吉は、記録映画の制作が、戦後日本における民主化の過程を映し出す重要な手段であると見做している。彼は、記録映画が、権力者の横暴を暴き出し、国民の目を覚ましてくれるべきであると訴えている。野田真吉の文章は、論理的であり、かつ感情的な訴求力を持っている。彼の主張は、当時の記録映画界に大きな衝撃を与えた。野田真吉の考えは、後の記録映画運動に大きな影響を与えた。彼は、記録映画が、社会を変えるための重要な武器であると信じている。野田真吉の文章は、読者に強い印象を与える。彼の主張は、当時の記録映画界に大きな衝撃を与えた。野田真吉の考えは、後の記録映画運動に大きな影響を与えた。彼は、記録映画が、社会を変えるための重要な武器であると信じている。

記録映画の理論的な場の記録としての『記録映画』

マーク・ノーネス (ミシガン大学教授)

日本のドキュメンタリー映像の研究をはじめ、もう二〇年以上にもなる。私にとつて、二〇年前の研究調査のはじまりは、雑誌『記録映画』を揃いで集めようとする試みのはじまりでもあった。だけれども、『記録映画』は、めったに目にかかれない雑誌で、なかなか集まらず、いまだに私は揃いで持っていない。そんなわけだから、不二出版が雑誌『記録映画』の複製版をリプリントすることは、とってもワクワクする喜ばしい「事件」だ。

雑誌『記録映画』は教育映画作家協会(作協)が発行した機関誌である。作協とは、日本が占領から解放されたあとで、教育映画やP R映画といったノンフィクション映画をつくる映像製作者たちがつどった、最も有名な集まりだ。一九五八年、彼らは自らの運動のための雑誌として『記録映画』を発行しはじめ。雑誌づくりという運動の中で、ドキュメンタリー映像が未来に持ちこたえられるであろうイメージが思い描かれていった。すなわち、ドキュメンタリー映像作家の、作家性や主体性を論じた、たくさんの重要な論文が『記録映画』に掲載されたのである。たくさんの論稿が論争しつたやり取りをはじめたキッカケは、『記録映画』が発行される前の、一九五七年の二月にある。その月の『教育映画作家協会々報』に、松本俊夫の論文「作家の主体ということ」が掲載されたのだ。この文章は、その後一〇年以上にもわたって、松本が映画の政治的な問題と、映像の美学的な考察を論じていく、はじまりになった論文でもあった。松本の「作家の主体ということ」は、彼自身そして『記録映画』の論争のはじまりであるとともに、新世代のはじまりを告げる文章でもあった。

松本の「作家の主体ということ」は多くの関係者たちの心を揺さぶり、そこから生まれた熱狂的な興奮と反発は、作協を揺るがした。たとえば、作協のリーダーだった吉見泰は松本の論調に対して、強烈な反論を投げかけたのである。雑誌『記録映画』は、文字通り、新しい映画を導きだすシナリオを掲載すると共に、新しい映画の製作を支える、理論的な議論の場を提供した。そして、議論の背後にあるのは、議論の主題そのものにもなることであった、新左翼と旧左翼の争いである。

一九五九年の初頭には、『記録映画』編集の実権を、松本俊夫と、野田真吉ら松本の支持者が握った。花田清輝や佐藤忠男、瓜生忠夫といった作協のメンバー

ではない批評家たちとの協力関係をつくり上げながら、彼らに原稿の執筆を依頼するようになる。ドキュメンタリー映画が魅力的なのは、我々が生きている世界に対する想いを表現しているからである。しかし、ドキュメンタリー映画は、権力の中枢にわけもなく奉仕するし、国家的規模あるいはグローバルな規模で影響を及ぼすことが出来る。ドキュメンタリー映画のこの本質が困難な時代には、議論の的になる。複雑でさまざまな傾向の力が、ドキュメンタリー映画にはおよんでいるのだ。そして、その矛盾した諸力が交錯する場所に、一九五〇年代末から一九六〇年代初頭にかけての『記録映画』の執筆者たちは身を置いていた。彼らが明らかにしたところによれば、旧世代の作家たちが信奉したりアリズムは、ある意味で偽りだった。そのリアリズムは国家のプロパガンダと産業界のP Rに深く加担している。表現されているのは、抑圧的な権力を代弁する、あやしげな「リアリズム」であろう。

一九六〇年の『記録映画』の編集委員会は、新しい編集方針として、ノンフィクション映画を根本的に変革するような方向性を示している。一九六〇年一月二日に開催された作協の第七回総会で、作協は「教育映画作家協会」から「記録映画作家協会」へと名称を変更する。それは、「教育」という名称をすてさって、会員のドキュメンタリストとしての自覚を強める変化だった。『記録映画』に掲載された文章の中には、事物の記録としてのドキュメンタリー映画よりも、強力な個性によって実現するアーティストイックなドキュメンタリー映画を目指すものが現れた。一九六一年には、表紙をカラーにして、幅広い執筆を書き手とすること、書店で一般の読者にもっと買ってもらうことと『記録映画』は、かわっていった。

一九五〇年代の終わりまでは、作協はドキュメンタリーの愛好者たちをひきつけていた。そこでは、一九六〇年の安保条約反対闘争をめぐる議論や、そこから生まれた左翼をめぐる論争もつきものだった。その中からは、旧左翼に距離をとる人々もあらわれた。彼らは集まってグループをつくり、それが結果的に映像芸術の会と彼らの機関誌『映像芸術』をつくっていくことになる。

雑誌『記録映画』は、ヌーヴェル・バーグと安保闘争の時代に、最も重要な映画論がいくつも交わされた場である。『記録映画』は、あの緊迫した時代に、たくさんの魅力的な映画作家、批評家、理論家に関わり合う交流の場だった。『記録映画』という、大切なはじまりを告げる雑誌を複製してくれる不二出版に、心からの賛辞をおくる。 (佐藤洋 訳)

『記録映画』復刻に寄せて

松本俊夫 (映画監督・映像作家)

半世紀も前に出版され、同時代的には何かにつけ話題となった月刊の映画運動誌『記録映画』が、このほど昔の体裁のまま全冊復刻されることになった。何らかの形で創刊以来この雑誌の編集関係者の一人だった私としては、懐かしさや恥ずかしさの入り混った奇妙な感慨に襲われている。

雑誌『記録映画』は、教育映画作家協会(途中から記録映画作家協会と改称)の機関誌として一九五八年六月に創刊され、以後一九六四年三月、協会の分裂問題で廃刊されるまで、ほとんど月刊で通算六五冊を世に送っている。

前提として頭に入れてほしいのは、作家協会の会員は広義の記録(文化)映画で作品づくりをしている監督や脚本家だったことである。いわゆる職能組合的な側面の併合も否定はしないが、あくまで根源的には作家としての生き方や映画観を、相互刺戟的に触れ合わせてゆける場づくりを共有しようとする自覚がそこにはあった。その《場》として雑誌『記録映画』が誕生したことの意味は大きい。現役の作家たちが自力で五年数ヶ月に六五冊もの雑誌を刊行し続けた例は、世界の映画史上でもあまりないだろう。

もう一つあえて触れておきたかったのは、この雑誌が発刊されていた今から半世紀前とは、日本の戦後史上未曾有の変革期だったということにほかならない。その新時代の空気は『記録映画』のいたるところで実感できるが、かつての出来事と向き合う時間差が大きくなってくると、それ自体が批評の対象を現在の視座から二重構造的に批評することになる。そこにはメタ批評的視座が立ち上がってきて、物の見方が変わってゆく契機にもなりそうだ。

主要執筆者一覧

川本博康	玉井五一	藤原智子
京極高英	寺山修司	ブニエール、ルイス
楠木徳男	東松照明	古川良範
久保田義久	徳永瑞夫	榎木恭介
クラカウア、ジューグフリード	富沢幸男	松尾一郎
黒木和雄	豊田敬太	松川八洲雄
粟津 潔	苗田康夫	松本俊夫
飯村隆彦	永富映次郎	間宮則夫
池田龍雄	長野千秋	丸山章治
岩佐氏寿	二木宏二	水野 肇
岩崎 昶	西江孝之	持田裕生
岩淵正嘉	西尾善介	八幡省三
岩堀喜久男	佐藤忠男	矢部正男
大島辰雄	佐野美津男	山岸一章
大島 渚	島谷陽一郎	山際永三 (高倉光夫)
大島正明	杉原せつ	山之内重己
大沼鉄郎	杉山正美	吉田喜重
小笠原基生	関根 弘	吉見 泰
岡本昌雄	高島一男	ローサ、ポール
小川 徹	高瀬昭治	ロード、シンクレア
各務 宏	高橋秀昌 (田島 浩)	和田 勉
粕 三平	武井昭夫	
加納竜一	谷川義雄	
	深江正彦	

●特集一覧

巻号	年月	特集
一巻	一九五九年三月	マス・コミ時代の記録・教育映画
二巻	一九五九年四月	教育映画を模索する
三巻	一九五九年七月	科学映画は変革への行動を開始する
四巻	一九五九年八月	記録映画の戦後体験
五巻	一九五九年九月	映画運動の展望
六巻	一九五九年十月	現代の方法を探る
七巻	一九五九年十一月	記録映画の今日的課題「失業・炭鉱合理化との闘い」
八巻	一九五九年十二月	現代の映画
九巻	一九六〇年一月	モンタージュの再検討
一〇巻	一九六〇年二月	映画と教育/作家の発言
一一巻	一九六〇年三月	創造的想像力
一二巻	一九六〇年四月	映画表現の技術
一三巻	一九六〇年五月	批評精神の再組織
一四巻	一九六〇年六月	現代のマスコミ
一五巻	一九六〇年七月	現代の疎外と作家「一九六〇年六月」を批判する
一六巻	一九六〇年八月	映画表現の可能性と実験性
一七巻	一九六〇年九月	映画における抵抗
一八巻	一九六〇年十月	シナリオ論
一九巻	一九六〇年十一月	現代モダニズム批判
二〇巻	一九六〇年十二月	日常性とその破壊の論理
二一巻	一九六一年一月	現代のリアリズム
二二巻	一九六一年二月	現代のエモーション
二三巻	一九六一年三月	ニュース映画とドキュメンタリー
二四巻	一九六一年四月	私の方法論
二五巻	一九六一年五月	ドキュメンタリーの現代的視座I 評論疎外の記録
二六巻	一九六一年六月	ドキュメンタリーの現代的視座II 作品「西陣」をめぐって
二七巻	一九六一年七月	映画と思想
二八巻	一九六一年八月	記録映画作家研究 作家の発言と作家論
二九巻	一九六一年九月	私の記録映画論 各界からの苦言と提言
三〇巻	一九六一年十月	芸術的前衛のヴィジョン
三一巻	一九六一年十一月	新人の条件
三二巻	一九六一年十二月	発見と創造
三三巻	一九六二年一月	大衆論
三四巻	一九六二年二月	映画・インターナショナル
三五巻	一九六二年三月	シナリオ特集
三六巻	一九六二年四月	テレビ・ドキュメンタリー
三七巻	一九六二年五月	映画状況の現在
三八巻	一九六二年六月	PR映画の可能性
三九巻	一九六二年七月	虚構の意味
四〇巻	一九六二年八月	映像表現と聴覚性
四一巻	一九六二年九月	五月「非芸術」との対決
四二巻	一九六二年十月	七月「非芸術」の対決
四三巻	一九六二年十一月	七月「非芸術」の対決
四四巻	一九六二年十二月	現代映画作家論(I)——ドキュメンタリーとアバンギャルド
四五巻	一九六三年一月	現代映画作家論(II)

関連図書

九州サークル研究会 発行 (一九五八年〜一九六一年刊)
サークル村 全3巻・付録1・別冊1

別冊II解説(松下博文・坂口 博・井上洋子)・回想(小日向哲也・うえだひろし・加藤重一・河野信子)・総目次・索引
 付録II『労働芸術』『地下戦線』『炭鉱長屋』
 体裁II A5判・B5判・上製・総1、946頁
 推薦II有馬 学・池田浩士・上野千鶴子・鶴見俊輔
 価格II本体65,000円+税

九州全県と山口県の地域や職場のサークル相互の交流と連帯を目的として一九五八年九月に創刊された(サークル交流誌)。発行主体は九州サークル研究会。創刊時の編集委員は上野英信、木村日出夫、神谷国善、田中巖、谷川雁、田村和雅、花田克己、森一作、森崎和江。会員は数十のサークルに所属する二百余名であった。一九五九年に模索された(全国サークル交流誌)の提案と計画作成に大きな衝撃を与えた関連三誌と併せて復刻。敗戦後、集団の戦後思想史を形成したサークル運動の実相を伝える。

(一九五一年〜一九六〇年刊)
東京南部サークル雑誌集成 全3巻・付録1・別冊1

別冊II解説・解題(道場親信・浜賀知彦)・回想(浅田石一・桂川 寛・丸山照雄・望月新三郎)・総目次・索引
 付録II『松川報告詩集、松川構成詩』『東京文学新聞』ほか
 体裁II B5判・上製・総1、864頁
 推薦II小関智弘・坪井秀人・西川祐子・ハリール・ハルトウーニアン
 価格II本体68,000円+税

敗戦後、労働者らを主体とするサークル運動が全国各地で展開され、多くの雑誌や詩集を生み出した。本資料集成は東京南部におけるサークル運動を中心に、浜賀知彦氏によって蒐集された膨大な資料を復刻。戦後史研究の空白を埋める貴重な資料群。
 第一巻II『詩集下丸子』『京浜文学新聞』『くらしのうた』『石ツブテ』『文学南部』
 『京浜のうたこえ』『下丸子通信』『南部文学通信』/第二巻II『突堤』(第一三三号〜第一九号) /第三巻II『突堤』(第二〇号〜第二四号)『南部のうた』『版画集』『京浜絵の会』『生活版画集』